

# 北海道，十勝川完全航行の記録

土井玉男



## 一日 程一

- 4 1年
- 7. 3 0 大阪発
  - 7. 3 1 新得駅着→二股
  - 8. 1 停滞
  - 8. 2 二股→キナウシ
  - 8. 3 キナウシ→岩松……… 2隊合流
  - 8. 4 岩松→上毛根
  - 8. 5 上毛根→中島
  - 8. 6 中島→礼作別
  - 8. 7 礼作別→大津

『十勝川』この名称の根源はどこにあるのたろう。単に十勝岳を源にするからの意ではないと思う。私はこの名称の意を10項目以上から成る困難をつき破ってこの地を勝ち得た人々の苦勞からの自然発生的な名称であると解釈したい。

最初古川氏から十勝川を今夏合宿としてやりたと言われた時、その名称がいかにも温和に聞こえた事と、私自身石狩川という項目を取り上げていた都合もあり、或る種の不満を感じた。そこには困難な川に向かって突進しようとしている自分にとって、それはいとも簡単な川としてしか見られなかったからである。しかし、それを改めなければならなかった事は、私自身の事前調査においての不足をいかに痛感させられた。それは川

自体を確認する時、いかに多くの要素を含んでいて、その上に立たなければならないかという事を、いかに現わしているということである。それは川の流域であり、傾斜であり、地層、長期気候等である。増して相手は100分の1ないし200分の1という速さで流動している物体である。だから結果として、いかに困難な川とされていても好条件が重なりさえすれば、どんな川よりも容易にこなす事が出来る。

長い汽車旅を終えて新得の町へ着いたのは大阪を発ってから2日後の朝方であった。私達2人(平本氏)は連絡本部の都合上もあり、帯広まで行かれた。車中よりみる北海道は、原始林のおい繋る山中としか受けとれなかった。それだけに本州とは違ったうらぶれたある種のムードをたずさえていた。朝霧の立ちこめる白樺林の中から、白い煙を吹き吹き息をさらしながら登って来る汽車には、ある種の異郷を感じしめる何かがあった。その心の安まる静かなフレイキに、ねむけまなこをこすりながらも胸中は次第にその中にはまっていた。真夏と言えども150度前後しかない今夏の北海道は、その心とはうらはらにひんやりとした寒さを感じしめた。新得町よりトムラウ温泉行きのバスに乗り込んだのは、もはや3時を過ぎていた。しかし先日来の雨がたまったのか、途中の1カ所が崖くずれで通れないという無残な車掌の声で、岩松発電所で下ろされてしまった。

新得の町より少し離れたこの地点には、もはや家ははるか彼方に1戸見える位のものであった。耕地らしき所がなく、おまけにやせた黒土ときたからには、住むにも住めないものであろうか?。次方ないから道路わきにテントをはり、一夜の宿をそこに取る。古川氏は連絡本部にこの旨を告げてジープでも回してもらおうように又、町へ下りられた。

昨朝早く来てくれた小型の車に我々3人(古川藤原)は乗り込んだ。(偵察の結果、上流は3名のみで小さいボートを使ってやる事は決まっていた)、上流に行くに従って道もさる事ながら、附近の原生林はいよいよもって委みを増して来た。フキは背丈程もあり原木の腐りかけたのがあちこちにころがっている。航行地点についたのは正午前であった、川の水は偵察の時よりも増えているように感ぜられた。フキをかきわけるようにして川辺に近づくと、冷んやりとした冷氣にも増して、川面を走る風は、身を縮め、意気までも縮こませるかのようであった。交代で、海水パンツに着替え救命具をつけながらボートに空気を入れて行く、次第にボートのふくらみが増して来ると同時に縮こまりかけた意気も又、ふくらんで来るかのようであった。用意万端とどのい出発となる。水量は以前見たよりも以上に多かった。増してその冷たさは冷氣所ではなかった。そしてその冷たい水流にあたかも押し流されるかのようすべり出した。川幅は岩を次第に侵食して出来たかのようであり、川の真中に石がゴロゴロしている事はない由に水は1カ所に集まり流れている、だから流足が早いだけに快調に進む、しかし山すそを走っている所では、至る所に原主林のくちた原木が横たわり、ボートを引き裂かんばかりにその烈け目をむき出しにしている。流れに乗ったボートは中々止まろうとしない、オールをさして何んとかブツカリをやわらげる。そのような行程をくり返しながら進んで行く、傾斜はあくまでも一定に保とうとするかのようである。しかしここで次第に頭にこびりついて来た事は、ここで大きな滝にパッと出くわした場合、いかにボートを操作するかと言う事である。その時がやって来たらしい、水音がかなり高く響いて来出した。慎重にオールを突っこんで行く、岩角を曲がるとパッと白波が

立ち水しぶきを上げている光景が、頭をかすめたかと思うと、もはや瀬に乗り込んでいた。ガクンと首をさげて突込んで行くボートにつられたかのように必死にオールをこぎ岩を突く、その一瞬にほんの少しでもスキがあったならば、身体は投げ出されボートは岩にぶっかっていたであろう。振り返りみるその滝は直角に落ちてゐるのではなく、1 m位の滝が3つ連続していたのである、その一瞬の心の空間を振り返っている間に、次の滝が見えて来た。しかしその滝は落ちた水が盛り上がりおりその下は瀬となっていた、田に高させいぜい50cmと判断した。難なく乗りこなせると安心したのはやはり前の大きな滝を乗りこなせたという大きな安堵感から来たものであろう。しかし実際はそうではなかった、高さにおいては想像通りであった滝も、その落ち口の水は一方に盛り上がり一方は普通というハンディがあった。その真中に乗り上げたボートはアッという間もなく転覆してしまった。水中にのみ込まれた時に脳りに浮かんだ

事は、「転覆してしまったなあ」という快とまで言えそうな冷静な反省感であった。次いで浮かんで来た事は、早く水面に上りボートを捕まえないといけないという事であった。その瞬間において始めて一種の焦燥感がわいて来た。あわててボートを捕まえて岸辺に寄せ、パートナーの安全を確かめる、全て無事であったことは前述の事く滝の下が濤状になっていた事だった。この一瞬のほんの数秒かの際の思考に何があつただろうか、それは人間性でも生命への不安でも責任感でもなかった快き眠り自然への帰着に対する喜びではなかったかと今もって回顧している。

その行程の明日後、我々は再び平元氏らと喜びの対面をし、そしてその後2台のボートを使い3日後には大津に着いた。そして新得町の農家に入り、1週間の酪農生活をし、十勝川合宿を終えたのである。

どい・たまお(文学部学生)

